

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 鷲崎弘朋
 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
 浜松町ダイヤビル2F

Tel. 090-3218-8622
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail info@zenyamaren.org

会報『邪馬台国新聞』

第9号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

新しい「令和」の時代に古代史解明を加速させよう

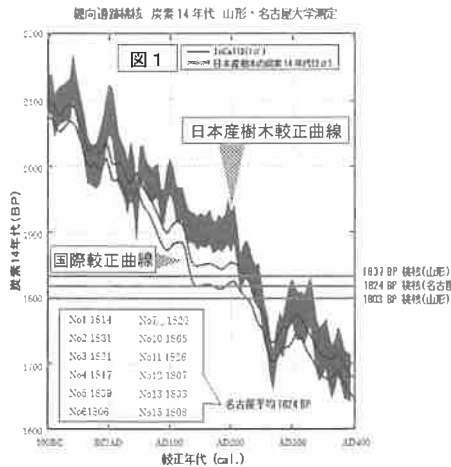
「邪馬台国と古代史解明」を掲げて平成26年(2014年)に発足した全邪馬連は、5月1日の「令和」改元の時点で、個人正会員396名(延べ)、19団体(所属約18,000名)、特別顧問26名、全国4支部体制(東京、近畿東海、中四国、九州)を展開しほぼ順調に発展してきた。ただ、最終目標の「邪馬台国と古代史解明」はまだまだ遠い。6年目の今年も、もう一度初心に戻り真実に一步でも近づこうと今年も会員個人々々としても前進しましょう。また、会員の拡大など会の発展に邁進しましょう。

さて、昨年度基本方針で重要3テーマを設置したが今年はより具体的に進める。以下3テーマに言及する。

1. 科学的年代論と年輪年代法(鷲崎会長がリーダー)
 A. 纜向遺跡出土の桃核(核) 2769個について当会も追及してきたが、測定結果が発表された(2

会報第9号 目次 (敬称略)	
会長挨拶	1
会員研究発表会概要報告	2
ワーキンググループ活動報告	2
顧問投稿 (一般)	3
吉岐一郎、島津義昭	
会員投稿 (一般)	5
尾関 郁、兒玉 眞	
「年代論」特集投稿	
顧問投稿	6
大平 裕、小田静夫、関 裕二、 宝賀寿男、森岡秀人、柳田康雄	
会員投稿	14
丸地三郎	
わが図書を読む	15
伊藤雅文、柴山島人、高川 博	
関連団体主催イベントのご案内	16
編集局だより	16

018年5月、纜向学研究センター)。ただ、炭素年代を実年代(暦年代)へ換算する国際較正曲線と日本産樹木較正曲線では紀元前後から4世紀にかけては結論が相当違うので(図1参照)、その解析や当会としての今後の対応を検討する。



次に、岡山県上東遺跡の桃核(核) 9,606個、津島遺跡の2,359個などのC14年代測定も検討する。これは、国立歴史民俗博物館(歴博)と岡山県古代吉備文化財センターの共同プロジェクトが既に開始され、桃核4個の炭素14年代速報値(AD1世紀後半〜2世紀前半)が出ているが、纜向桃核と同様に較正曲線の問題がある。

B. 歴博は酸素同位体比を用いた「新年輪年代法」(総合地球環境学研究所)による弥生時代・古墳時代の遺跡・遺物の年代測定や、日本産樹木較正曲線の完成を目指して再始動を始めることも考えられ、全邪馬連としてもフォローしたい。

酸素同位体比を用いた「新年輪年代法」は、新手法のため測定事例はまだ少ない。文化財保護法が改正され「従来の保護重視」からこの4月以降は「保護と活用の両立」へと転換したので、木材などの試

料を保管管理する博物館・研究所等は今後、測定用サンプルとして積極的に提供していただくことを期待したい。

また、年輪幅による「従来の年輪年代法」は、標準パターンと基礎データが非公開なので、研究者による検証を可能とするため、学会のため、また広く国民のためにデータ公開が望ましいと考えられる。

そこで、「従来の年輪年代法」について、奈良文化財研究所に対し①新旧標準パターンおよび②基礎データの開示公開)を要請する。

注) ①旧標準パターン…1990年作成(BC317〜AD1984をカバー)
 ②新標準パターン…2005〜2007年作成(BC705〜AD2000をカバー)

『独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律』平成29年5月施行
 2. 庄内式土器研究
 菊池事務局長がリーダー・西川修一先生に助言をいただいている。

土器については以前に庄内式土器研究会が関西で活動していた。かなり高度な研究会であったが活動を停止している。全邪馬連が活動を発展させる。

去る4月29日には、西川寿勝特別顧問(大阪府狭山池博物館主査)に「庄内式土器」の講演をいただいた。まだ勉強会の段階で、研究を今後本格化させる。

3. 漢鏡7期の研究
 石井好氏がリーダー(サブリーダー白崎勝氏)石井好氏が前から漢鏡7期の年代の考古学的矛盾をホケノ山古墳他をもとに追求している。また、白崎勝氏は破鏡について独自の仮説をたてている。

三角縁神獸鏡に関する新たな見解の出現(鈴木勉氏の国産説等)への対応
 同じく勉強会の段階で、研究を今後本格化させる。

同じく勉強会の段階で、研究を今後本格化させる。

会員研究発表会概要報告

第7回討論型研究発表会

日時 2019年1月12日(土) 13時から

場所 港区三田いきいきプラザ

討論のテーマ 『神武東征の出発点はどこか?』

発表者・演題・要旨

・丸地三郎 「神武東征の出発地点はどこか?」 要旨

神武の皇后が出雲系の事代主の娘であることから、系図と主な神話の順を示し天の岩戸↓天孫降臨↓海彦山彦↓出雲国譲り↓神武東征とした。東征の出発地には、鉄製武器・三種の神器・戦争遺跡・古代に遡る神社が遺跡・痕跡が残るはずと説き、宮崎県には無く、糸島に有ると、糸島出発説を示した。

・石井 好 「神武天皇は実在した。」 要旨

4世紀前半に奈良県に鉄製武器が急増することを示し、神武東征があったとし、又、大量の鉄製品を出土する伊都国糸島市から大和に遷都したことを示した。糸島から天孫降臨後、日向三代が鹿兒島・宮崎で過ごし、神武東征は宮崎から出発したとのルートを説いた。

・討論は、宮崎県には該当する遺物や古い神社の有無が問われた。宮崎側には無いことが問題となったが、鉄製武器が多く出土した遺跡が宮崎にあるとの新説がだされ、時代が合致するか不明のまま、討論を終了。

第9回会員研究発表会

日時 平成31年3月31日(日) 13時10分から

場所 三田いきいきプラザ

講師、演題、要旨

・蓮沼啓介 『魏志倭人伝の里程』 要旨

これまでは魏志倭人伝の里程は距離を示すと解釈されて来た。今回の報告では里程は時間を表わすという新しい解釈を提唱する。例えば水行一千里とあれば舟旅で一日の日程であるし、陸行百里とあれば徒歩で一日の日程であるとすると、

公式の日程と著しい乖離があるが、これは役人の水増しである。

・新井 斉 『一万二千里の謎に迫る』

要旨・誇大な一万二千里を倍率で割ると700kmとなり所在地がわかる。

・尾関 郁 『じじ(政治) 論争の最終決着なるか?』

三国志の會稽東治の「じじ論争」がNI両氏に再燃させられた。そこで最終決着すべく私論を提示し皆さんと検討したい。

※発表後アンケートの結果、尾関さんが講演会に登壇されることになりました。

発表会の様子は動画に撮って、YouTubeにアップしてあります。

「全国耶馬台国連絡協議会」で検索してください。

第6回講演会

日時 平成31年4月28日(日) 13時10分から

場所 三田いきいきプラザ

講師、演題、要旨

・西川寿勝先生(大阪府立狭山池博物館)

『考古学からみた3〜4世紀の近畿と関東東北の交流』

耶馬台国の時代から古墳時代前期後半までに近畿・東海の土器や北陸の玉がいかに関東・東北に広がるか、最新の考古学の成果である、宮城県栗原市の入の沢遺跡の焼き討ちされた住居跡の話を中心としてお話し下さいました。

・神尾忠和(当会会員)

『中国語と韓国語で知る倭人伝』

倭人伝の語句を中国語・韓国語で解釈した話です。録音が不鮮明でYouTubeにアップできませんでした。

※西川先生の講演は6月号メルマガにYouTubeのURLを記載してあります。

限定公開のため、検索は出来ません。

ワーキンググループ活動報告

第2回打ち合わせを平成30年12月1日に「港区三田いきいきプラザ」で、鷺崎、石井、白崎、菊池の4名で行なった。

各グループ活動方針

①年輪年代と科学的年代論

・岡山の桃の種を中国・四国支部と連携してすすめる予定だったが、災害により現地の人達が活動できない状況にある。

・何箇所から出土しているので、出土状況が明白で他と対比できる試料の選定が重要。

・来春には軌道にのせたい。

・酸素同位体(中塚教授)との連携も行ないたい。

・纏向遺跡の桃の種に関しては別のグループ(鷺崎・内野・菊池・藤盛顧問)で打合せをすすめており、5月には東京支部主催の大会で「年輪年代」に関する討論会を実施した。

②漢鏡7期の研究……白崎氏の破鏡に関する基本論文にベースにして議論したが、出典が不明確の部分があり、神話の内容が突然結論としてでてきているので問題。再度まとめなおす。

③庄内式土器研究……難しい内容なので、まずは勉強会からスタート。

平成30年12月24日に「港区三田いきいきプラザ」で第1回勉強会、西川修一先生の講演「庄内式土器と古墳時代開始期土器研究のあゆみ」を実施した。参加人数は13名(講師含む)。

講演内容はかなり充実しており、今回の講演だけではもつたいないという意見が多かった。今後の課題(なにをすべきか)、運営方法については考える必要がある。

平成31年2月11日に「港区神明いきいきプラザ」で第2回勉強会、鷲崎リーダーの講演「科学的年代測定法と古代史」―年輪年代法の「弥生古墳時代100年遡上論」を徹底検証―を実施した。参加人数は20名(講師含む)。

講演内容はかなり充実していて、質疑応答も充実していた。参加者全員の総意として、奈良文化財研究所に未公開の年輪年代測定データの情報開示請求を行なうということが決定。情報開示請求は総会の議案にかけて承認をえてから行なうという意見が出た。

平成31年4月29日に「大井町きゅりあん」で第3回勉強会、西川寿勝特別顧問の講演を実施した。講演内容は、①「庄内式土器の基礎知識」―どこから来ていかに広がった?―②「庄内式土器・布留式土器の北部九州拡散」③「『魏志』倭人伝の原史料」―最初に邪馬台国を訪れた中国人は誰―。参加人数40名(講師含む)。

講演内容はかなり充実していて、質疑応答も充実していた。勉強会だけでなく、将来はワーキンググループ参加者による継続したテーマの研究活動を行ないたい。(菊池リーダー)

顧問投稿 (一般)

私の恩師 原田 大六さん

元沖縄大学教授 喜岐 一郎

原田さんは大六・大正6年(1917年)福岡県糸島生まれ。旧制糸島中学で作文と考古学に熱中、ほかの学科はスルーしたという。氏が私に話したことがあった。国語の教師が原田少年の作文を読んで「だれの文を写したのか」と。「いえ、自分で書きました」。嘘言うな、とやりとりしたという。敵父が本好き、令姉が高女に通っていたので国語のレベルが高かったと大六さんは笑った。大昔の旧制中学。高女の学力は今の大学教養課程に匹敵したと言える。

原田さんは中学を出ると東京で研磨工員になった。敵父は測量士、理工系の道はあつたが、文学・考古学に夢中になったから上の学校に行けなかった。この研磨工の経験が後に考古遺跡の発掘で役に立つとは思わなかった。はたちで兵隊に採られ、大陸で憲兵を命じられた。戦後、この軍歴のため代用教員をしていた時に追放になる。

当時、九州大学医学部には考古学者としても有名な中山平次郎博士が居られた。1920年代には中国の郭沫若氏が学生として師事していた。郭氏は医師の道を諦めて考古学・文学を選んで、新中国の指導者になってから、福岡市の中山邸を訪れている。原田さんは1日6時間、9年近く中山博士の講義を受けている。奇しくも郭氏の弟子になったのだ。56年に博士は亡くなり、原田さんはかの沖ノ島調査に参加している。

書き続ける

大六さんは歯を食いしばって原稿用紙に向かっていった。粒粒辛苦、1千枚の『日本国家の起源』を書き上げる。彼は周

りの新聞記者に「八無齋」と称していた。林子平をもじつたものだ。妻も子もなく金もない、肩書もないと笑っていたが、眼はらんらんと高嶺を仰いでいた。

福岡市の西、糸島の青年研究者を見る人は見えていた。先ず1950年に『日本古墳文化形成過程の研究』にまとめた原稿が54年に『日本古墳文化―奴国王の環境―』として東京大学出版会から上梓された。

このころ、氏は前記の沖ノ島の発掘調査に参加、報告書の一部を担当している。57年、39歳でイトノさんと結婚、大六さんの面倒をみていた令姉と同じく教員だった。

一方、住まいの傍の平原遺跡の調査が始まっていた。眼光鋭い原田氏は「平原弥生古墳」と表現した。

列島最大の鏡が出土したのだ。今、「内行花文八葉鏡」として知られる大鏡だ。5枚分が割れて出土して復元しても4枚分しかなかったのは彼は残る1枚はあの伊勢神宮にご神体としてであると喝破した。敗戦直後、進駐した米兵が方50センチの木箱に詰められた現物を見たといひ、箱のサイズから鏡は46.5センチと推定されるとした。

銅鏡の復元で彼は私に話したことがある。

「磨くだけでも2年かかるったい」

「何で磨きますか」

「最終的に鹿の皮たい」

元研磨工として大六さんは詳しく説明した。京大・小林行雄教授の三角縁神鏡について「伝世鏡」説を木っ端みじんに破った。「ケンカ大六」の面目躍如だ。

書きまくる

40歳過ぎから出版が続いた。玄関には訪問客を断り調べ書き続けるために「訪問お断り」の札を出した。

主な著書は、

61年『邪馬台国論争』三一書房

63年『磐井の叛乱』三一書房

66年『実在した神話』学生社

71年『卑弥呼の鏡』六興出版

73年『万葉集発掘』朝日新聞社

80年『銅鐸への挑戦』全5巻 六興出版

この間、テレビドキュメンタリーの主人公になっている。九州朝日放送『王墓を掘る男』藤岡勝・構成演出で今も伊都国歴史博物館に保管されている。注目のシーンは考古遺跡調査報告書の出版に煮え切らない福岡県教育委員会に乗り込んで現ナマ200万円を叩きつける場面だ。

84年、氏は多年の考古学調査研究の貢献について「西日本文化賞(西日本新聞主催)」を受賞した。ホテルには200人をこえる人が集まったが、罵倒された大学教授らも多数参加していた。なお、テレビの関係は私だけのようだった。

原田大六さんには東京でも会っている。東京支社にいた私に藤岡ディレクターから連絡があり、大六さんが宮内庁書陵部の銅鏡展示会に招待されて行くから付き合ってくれという。会場には30面ほどの銅鏡が展示されていたが、大六さんはその1面を見て目ざとく解説のミスを指摘した。係員は気づいて恐縮して訂正していた。また、ある日、福岡に転勤した私に「お客様です」と受付の女性が脅えたような声で電話して来た。大六さんは時代劇の悪役のような風貌だ(失礼!)社の玄関横にある喫茶ルームで語った。

「墓掘りはわしのライフワークではなか」

「え?」疑う私に氏は莞爾と笑った。俗物にはわからんともいうように。

「万葉集の考古学的解説したい」

あ、そうか、文学とその突出した表現が考古遺跡・遺物の解析と結びついたのだ。文系と理工系の実績が結実した半世紀か、と気づいたのはかなり後だ。

原田大六はアカデミーを罵倒したが妙に大学人からも尊敬

されていた。

惜しまれる早逝

当時の新説、例えば「筑紫女王国・銅鏡文化 vs 出雲銅鐸文化・大國主 ↓ 大和東遷」という説など十分に発展させる時間もなく、氏は68歳で他界した。研究者としては早過ぎた。研究領域を広げてもらいたい分野も多かった。

ある講演会での発言に鮮明な記憶がある。朝鮮海峡を往復する帯方郡使や倭使の船のことだ。聴衆の質問で費用がいくらかかるか、で当時は丸木舟のイメージが支配し、某新聞などはその実験航海を企画していた。

大六さんは言下に丸木舟説を否定、億の金と言った。

「魏の使いは構造船で渡っている。構造船が遭らないのは疑却するからだ」と。

まさに炯眼だった。構造船はもがりにも使われたという。

三国志時代の400年前に黄海を横断する大船を造り馬百頭を載せて操縦する技術があった『史記』『漢書』。

1985年、原田氏は急逝した。

没後出された本も多く、記念会も発足、広くその業績が認識されている。今、馬齢を重ねた老生、87歳、彼の訶咳に接した幸運を噛みしめている。

次回終り 直木孝次郎さん

中国に知られた阿蘇山について

島津 義昭

熊本県の阿蘇地方は弥生時代には、鉄やベニガラを生産が盛んで邪馬台国の所在地について何らかの係りがあるとみられる(菊池秀夫2018 邪馬台国と天皇家 古代史文化フォーラム)。この阿蘇地方を象徴する阿蘇山は、列島で最初に外国に知られた山である。中国では唐の魏徵・長孫無忌が貞観10年(636)の『隋書(倭国伝)』に阿蘇山の名がみえる

(石原道博編1985 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 岩波書店)。

有阿蘇山其石無故火接天物俗以為異因行禱祭有如意寶珠其色青大如鵝卵夜則光有云魚眼睛也

この記事は、後世の中国の著作物に大きな影響を与えた。明の官僚で、学者でもあった馮應京が万暦年間(1573-1620)に著した『月令廣義』は中国の伝統的な年中行事・儀式などの解説本であるが、次のように阿蘇山を壽安鎮國山としたことが記される(月令廣義1937 松下見林編 異称日本傳卷中三 改定史籍集覽所収に引用がある)。

日本國阿蘇山石火起接天俗異而禱之大永樂初年封為壽安鎮國山如鵝卵夜則光永樂初年封為壽安鎮國山

明・永樂帝は支配下にある外蕃諸國の山を祀り「封山の典」を行った。永樂4年(1406)には壹岐・對馬の海寇退治で功のあつた源氏道義(足利義滿)に対し褒美の品を贈り、日本の山に壽安鎮國山の称号を与え、自筆の碑を建立した(大明太宗実録・卷50)。また同じ頃(1583年)の『殊域周咨録(卷3 東夷日本国)』(殊域周咨録20 中國哲學書電



子化計劃 <https://context.org/wiki.pl?file=gb&res=918541>
では次のように記す。

其山曰壽安鎮国永樂御制碑文具前曰阿蘇山石無故火起接天
俗以為異因行禱有如意宝珠大如鷄卵其色青夜則有光

この両書は前述の『隋書』の記事を踏まえ、永樂帝碑文の
所在地を阿蘇山と判断している。

広く中国文献を収集し解題を行った松下見林『異称日本傳』
(元禄元年・1688)では、上記を次のように解釈した。

今按阿蘇山事見隋書壽安鎮国山事見大明一統志而記封何山
以此號今抛月命廣義即封阿蘇山以此號也

永樂帝毫筆の碑については、わが国でも広く知られ、江戸
時代から関心が持たれていた。享保2年(1735)に本草
学者の丹羽正伯が、明・永樂帝の「壽安鎮国山」にかかる記
録類の有無を細川藩に照会している(永青文庫「家譜統編」・
佐藤征子1999 阿蘇山信仰)。壽安鎮国山を阿蘇山とし
ない説もある(小葉田淳1941 中世日支通行貿易史の研究)。
その理由は日本の実情調査のため来日し、大友氏によ
り幽閉された鄭舜功が赦免後、帰国後に記した『日本一鑑』
には、京都萬壽寺の記載があることから「壽安鎮国寺」の所
在地も同様に京都をとるべきとしている。また、『和漢三才
図会』『肥後國誌』『新撰事蹟考』等にも壽安鎮国山の記事が
ある(佐藤征子1999 阿蘇町史第3巻)。

今日決定的な証拠は得られていないものの、古くから中国
で知られていた点を考慮すると「壽安鎮国山」は阿蘇山を指
し、その永樂帝石碑建立地は阿蘇山(山頂か?)であろう。
度重なる噴火や土石流で石碑は埋没している可能性は高いが、
将来に見えされることを期待しておきたい。

なお、南麓の山村酒造は宝暦12年(1762年)創業の
古い酒蔵である。神々の宿る「壺山阿蘇」にちなみ「壺山」
「いざん」及び「寿安山」を銘柄としている。

会員投稿 (一般)

ジャマイチ国(邪馬壹/臺國) 候補の

選別機をつくったヨ

東京都 尾関 郁

どうして五十もあるジャマイチ国候補をそのまま放置続
けているのでしょうか。それは学者や学会が真贋を選別する
装置を作らないからです。そこで不肖、私が未熟ながらも勇
気を奮って作ってみました。それは九つの可愛いフィルター
が付いているもので、次にご紹介しましょう。

i 方角：東(約九十度)ずれている説は、志岐が対馬の東にな
ければ整合しない。列島が南北に長い地図の信憑性は無い。

ii 距離：末盧国から二千里は、拙稿(歴研二〇一五年版)の
一里百メートル前後で計算すれば岡山市に届かないし、狗
邪韓国から末盧国までの三千里の三分の二は広島県内である。

iii 人口・面積：漢書地理志の一戸約五人の記述から七万戸は
約三五万で、大きな湖・湿地帯が想定できる奈良では無理。

iv 遺物：鉄製品や絹は北九州にあるが纏向にはまず無い。
v 「水行」：「川を進む」と判明し本年五月の九歴文会におけ
る拙稿)、不弥国以降の「水行」は九州内を南に進む。

vi 地名遷移：古閑炯作氏は二〇〇五年の当会の「研究発表会
にて北九州から約六十もの地名が近畿に移っていると発表し
ている。

vii 「京」地名：筑後平野の周りにかなりあって纏向に無い。
viii 「南に狗奴國」：九州では熊本や宮崎に想定できるが奈良で
は吉野熊野に強い国が想定できない。

ix 「東の海を渡ると國」：奈良の東はすぐ海ではない。
以上です。これらのフィルターのすべてで引っかかるのは

奈良で、通過するのは筑後平野から行橋辺りまでです。
この装置は客観性があると思いますが、いかがでしょうか？

反論のある方はこの欄に投稿をお願いします。

『倭国報告書』を書いていたのは

景初三年派遣の仮の帯方郡使

兒玉 眞

邪馬台国に行かず伊都国で倭国報告書を書いていた帯方
郡使は実在したと考えられます。

但し、彼らは正始元年(AD240) 実際に邪馬台国へ詣
で卑弥呼に謁見した正使梯儻らではなく、景初三年(AD2
39) 難升米らの倭使を送還するために遣された、倭国調査
隊も兼ねた仮の帯方郡使でありました。

私は卑弥呼の魏朝献年を『魏志倭人伝』の記載どおり景初
二年(AD238) と考えていますが、同年十二月に倭使と
謁見した明帝が翌年正月に急死すると景初三年が国喪となっ
た魏は年内に正使を派遣できなくなり、正使梯儻らの倭国派
遣は正始元年へと持ち越されたわけです。

だが、難升米らの倭使は一刻も早く帰国し、明帝から「親
魏倭王」に制証されたと卑弥呼に報告し、戴いた大量の下賜
品の明細が付された録も届けねばならなかったため、倭使を
景初三年中に帰国させたはずなのです。

倭使を送還した仮の帯方郡使は倭国調査隊を兼ねていた
ので、伊都国迄直接船で行く方が遥かに早く着くのに、わざ
わざ手前の末盧国で呼子港辺りに上陸すると、草木繁茂し、
行くに前に人を見ずと称される悪路をたぶん帰還する倭使に
案内され、伊都国迄の五百里を陸行しつつ、倭国の風景や倭
人たちの風俗を鑑賞・観察し『倭国報告書』に書き込んでい
たようです。

これがもし梯儻ら魏の正使ならば、倭王に賜る大量の賜遺
の品を抱えたまま、それ等を失う危険性の高い悪路の長距離
陸行などは決して行わなかったことでしょう。
伊都国迄帰還した倭使はその後一大率に託され、王都・邪

馬台国へ無事送還されたと思われるが、倭使を伊都国まで送還してきた仮の帯方郡使は、立場上王都に行けないのでそのまま伊都国に駐留し、伊都国と周囲の国々を往来しながら倭国に関する情報を収集しつつ、「倭国報告書」を書いていたようです。

年代論特集

顧問投稿

「年代」を無視してきた学者たちへ

(公) 大平正芳記念財団 大平裕

我が国は古代、暦がなかったといわれています。「魏志倭人伝」には、倭人は正月を知らないが、春の耕作と秋の収穫を記録して年数を数えている、また、倭人の寿命は、百年、あるいは八、九〇年の長寿であると記しています。それでも、大陸の王朝の記録には、前漢武帝による衛氏朝鮮征伐(B.C.一〇八年)以降、倭の各地三〇余か国からの朝貢が記されています。

西暦五七七年の倭奴国による遣使奉獻、西暦一〇七七年の倭国王帥升等による遣使奉獻、西暦二二九九年の倭女王卑弥呼、升米等を遣わし洛陽に奉獻、西暦二六六年の倭の女王遣使、帯方郡にて朝貢などが挙げられます。これらはいずれもやみくもに出かけたのではなく、大陸からの情報を得たうえでの目的と時期をはっきりさせて遣使が行われたと思われる。これらの遣使の背景には、帰化した漢人、任那、加羅などに居住していた倭人、朝鮮半島出身の人々の暦・干支の知識、天文・天測の知識を持った航海熟練者たちの協力があったに違いありません。そして、使節たちには、外交・交易に必須な漢字・漢文の知識も必要でした。しかし、これらの人々は特別な存在で、本格的に暦が採り

入れられたのは、宋の「元嘉曆」(四四五〜五〇九年)からでした。「元嘉曆」が制定された四四五年の直後の四五一年、倭王「済」(允恭天皇)の遣使の際には、早くも持ち帰られたものと思われる。百済経由で「元嘉曆」制定直後の四四五年に招来されたという説もありますが、当時、百済は高句麗との長期にわたる交戦状態でしたから、そのような余裕はなかったと思われます。「日本書紀」允恭天皇紀には、「元嘉曆」を使用した痕跡が見当たらないことなどから、筆者は、四五年の遣使の際にもたらされたのが妥当と考えています。「日本書紀」に記された年代、允恭天皇の次の安康天皇元年(四五四四年)が、「元嘉曆」の年代と一致することから、四五年頃に将来され、習熟するための時間などを勘案して、実際の使用は四五四四年の安康天皇即位以降と考えられます。

中国の各王朝の暦と倭国 (対比代表例)

前漢	大正暦 (西紀104-1)	後漢	魏	西晋	東晋	宋	南朝	北朝	隋	唐
四分曆 (220-236)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)	魏初中元2年 (57年) 永初元年 (107年) 中平 (184~189年)

これはつまり、四四五年以降の年代は我が国の大陸王朝、朝鮮半島各国の年代と一致することを意味します。このことによつて、「倭の五王」の「讚・珍・済・興・武」の治世と年代は、これまでの通説・定説と全く違つてきます。もう一つ大事なことは、允恭、仁徳、応神天皇三代で紀年の延長が一二〇年図られていることです。これまでも、応神、神功皇后のあたりで干支二回り、一二〇年の延長が図られているということが分かっていましたが、この一二〇年の延長の内訳

を解決したのが、次の表です。「日本書紀」には、明らかに延長の痕跡が残されていて、それを考慮して作成したのがこの表です。詳細は「暦で読み解く古代天皇の謎」(P.H.P文庫)を参照。『日本書紀』が紀年の延長を履行したのには、やむを得ない事情があったからなのです。『日本書紀』が意図したのは、応神天皇即位年を、西暦二七〇年とし、母后である神功皇后の治世を二〇一〜二六九年の間とすることで、「魏志倭人伝」が伝える女王卑弥呼と台与(豊)の治世に合わせる、擬することでした。本来、神功皇后の治世は、仲哀天皇崩御(三二二年)から三八九年までの二七年間です。「魏志倭人伝」の伝える卑弥呼は、我が国の祖先神である天照大神に相当すると筆者は考えていますが、『日本書紀』の編纂者たちは、天照大神は、はるか悠遠の天上の神で、卑弥呼の時代と合致するなどということは想像も及ばなかったのです。

日本書紀の紀年数と加算された紀年

日本書紀の紀年数	加算された紀年 (筆者註) (西暦)	西暦年 (筆者案)	古事記 崩年干支
応神 270-310年	41年 34年 34年	390-394年	394年
空位 311-312年	2年 2年 2年	395-396年	—
仁徳 313-399年	87年 56年 56年	397-427年	427年
履中 400-405年	6年 0年 6年	428-433年	432年
反正 406-410年	5年 1年 1年	434-437年	437年
空位 411年	1年 1年 0年	—	—
允恭 412-453年	42年 26年 20年	438-453年	454年
安康 454-456年	3年 0年 1年	454-456年	—
計	187年 187年 120年	120年	67年

また、次の内田正男編著『日本書紀暦日原典』(雄山閣)によりますと、反正天皇崩御(反正五年春正月二三日)の年は、実質一年の空位と次の一年が丸々加算となっていることが分かります。この空位に関しては、允恭天皇が病身を理由に皇位を辞退し続けた事情が『日本書紀』に詳細に記されていますので、その影響ということも否定できません。もう一つ、いわゆる「倭の五王」の「興・武」にかかわる決定的な問題です。「興」は安康天皇、「武」は雄略天皇というのがこれまでの

反正天皇崩御と允恭天皇即位年

天皇	年	干支	月	崩御		即位	
				干支	グレゴリオ暦	干支	グレゴリオ暦
反正天皇	5年	庚戌	1	甲寅	410	1	22
			2	乙卯	410	2	21
			3	丙辰	410	3	20
			4	丁巳	410	4	19
			5	戊午	410	5	18
			6	己未	410	6	17
			7	庚申	410	7	16
			8	辛酉	410	8	15
			9	壬戌	410	9	14
			10	癸亥	410	10	13
			11	甲子	411	11	12
			12	乙丑	411	12	11
允恭天皇	元年	壬子	1	丙寅	412	1	31
			2	丁卯	412	2	29
			3	戊辰	412	3	28
			4	己巳	412	4	26
			5	庚午	412	5	26
			6	辛未	412	6	25
			7	壬申	412	7	24
			8	癸酉	412	8	23
			9	甲戌	412	9	22
			10	乙亥	412	10	21
			11	丙子	412	11	20
			12	丁丑	413	12	19
同	2年	癸丑	1	丁卯	413	2	18
			2	戊辰	413	3	18
			3	己巳	413	4	17
			4	庚午	413	5	16
			5	辛未	413	6	15
			6	壬申	413	7	14
			7	癸酉	413	8	13
			8	甲戌	413	9	12
			9	乙亥	413	10	11
			10	丙子	413	11	10
			11	丁丑	414	12	9

(筆者注) 反正五年庚戌一月〜二月は空位、辛亥一月〜二月は加算

通説でした。雄略天皇の幼名が「大泊瀬幼武天皇」ということで、倭の五王の「武」に比定されていますが、雄略天皇の次の清寧天皇の幼名も「白髮武広押稚日本根子天皇」です。皇位の順から済(允恭天皇)の次は「興」⇨「安康天皇、そして次は諡号の一字から単純に「武」⇨雄略天皇であると思いついて入ってしまったのです。

ところが、安康天皇の在位は先に挙げた『日本書紀』の紀年数から、西暦四五四〜四五六年、雄略天皇元年は四五七年となります。雄略天皇元年が四五七年というのを裏付けてくれるのが、一九七一年韓国の公州宋山里で発見された、百済の第二五代武寧王と王妃の墓誌で、「寧東大將軍百濟斯麻王、年六十二歳、癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩、到乙巳年八月癸酉朔十二日甲申、安厝登冠大墓、立志如左」とあります。年六二歳という、生まれたのは四六一年、これは、『日本書紀』雄略天皇紀五年(四六一)六月一日の条の「筑紫の加唐島で生まれた島君が後の武寧王」と一致します。また、継体一七年(五二二)の「夏五月、百濟王武寧が薨じた。」の記事とも一致します。

さらに、一九七八年、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文

からも雄略天皇の長い治世が証明されます。一方、中国側の史料には、

大明四年(四六〇)二月、倭国遣使献方物。(『宋書』帝紀、孝文帝) 濟死、世子興遣使貢獻。(『宋書』列伝、夷蛮)

大明六年(四六二)三月、以倭国国王世子興為安東將軍(『宋書』帝紀、文帝) 世祖大明六年、詔曰「王子興、奕世載忠、作藩海外、粟化寧境、恭修貢職。新嗣辺業、宣授爵号、可安東將軍、倭国王。(『宋書』列伝、夷蛮)

昇明元年(四七七)冬十一月己酉、倭国遣使献方物。(『宋書』帝紀、順帝) 興死、弟武立、自称使持節、都督倭百濟新羅任那加羅奈 慕韓七諸国軍事、安東大將軍、倭国王。(『宋書』列伝、夷蛮)

これまで長年古代史の研究者たちは倭王「興」を、ほとんど年代を検証することなく、安康天皇に当て来ました。肝心の安康天皇の治世は三年と短い上に、太子であった木梨輕皇子と妹の輕大娘皇女との兄妹相姦事件や自身の結婚に際して

が解読され、そこに記された「辛亥年七月中心乎獲居臣……」が、雄略天皇一五年(四七一)に当たり、出土した鉄剣が「獲加多支鹵大王(雄略天皇)」の頃のもので、四七一年の時点で雄略天皇が在位を重ねていたことが判明しました。またこの解読によって、熊本県江田船山古墳出土の鉄剣に刻まれた「ワカタケル大王」銘文

の血なまぐさい争いなど政情不安定で、到底宋への遣使どころではない状態でした。それに中国側の記録「宋書」では、「興」の在位は少なくとも四六〇年から四七七年の一七七年わたっています。まず年代から考えても、「興」が遣使した四六〇年には安康天皇は存在していません。逆に雄略天皇の治世は、四五七〜四七七年(通説四七九年)と長く、中国側の記録(『宋書』)と年代的に一致します。よって、「倭王「興」は安康天皇ではなく、雄略天皇ということになります。

『倭の五王―空白の五世紀』(教育社)の著者坂元義種は、その著書の中で「倭の五王の研究は、まず何よりも中国史書のなかの倭の五王を明らかにすることが肝要であろう。」と記しています。それではなぜ「倭の五王」を論じる大本の「宋書」に記された年代と、『日本書紀』の各天皇との紀年について言及しないのでしょうか。

最近出版され、大きな反響を呼んだ河内春人著『倭の五王王位継承と五世紀の東アジア』(中公新書)は、「五世紀の倭国史について考えるとき、『宋書』倭国伝と記・紀のいずれに重点を置くべきかはいうまでもない。まずは『宋書』倭国伝を中心に据えるべきであり、記・紀はその補助史料として位置づけられるべきである。」と、執筆の意図を記し、この本の大半を五世紀の東アジア情勢と倭国の関係を詳述しています。ところが、「倭の五王とは誰か―比定の歴史と記・紀の呪縛」という章では、稲荷山出土の鉄剣銘の「辛亥年」を四七一年ではなく五三一年と遅らせ、「ワカタケル」が果たして雄略天皇なのか、などの論を展開、「現時点で筆者にも確定とする案はない。武とワカタケル、四七一年前後の王の問題は今後の課題として残される。」との結論には、まったく肩透かしを食わされたようなものです。韓国公州宋山里で発見された武寧王陵の墓誌の、継体一七六二歳で崩御の銘文に、著者はどのような見解を持っているのか、お尋ねしたいものです。

内田正男編著『日本書紀原典』(新装版) (雄山閣)より

最後に、四五七年皇位を継いだ倭王興(雄略天皇)の宋への朝貢が、何故四六〇年と遅れたかについてですが、雄略天皇が皇位を継承するにあたっては、ライバルたちを次々と殺害、徹底的に排除し、政争に明け暮れていたため、宋へ朝貢できるような状態ではなかったからだと考えられます。それより二、三年に及び、簡単には決着しなかったのです。

これまで述べてきましたように、「日本書紀」の内容を疑い、軽視し、西暦四五一年頃に到来した「元嘉曆」を無視、埼玉古墳、江田船山古墳出土の鉄剣の銘文、さらには韓国出土の武寧王陵の墓誌など、貴重な年代を刻んだ貴重史料をないがしろにしている学者たちに猛省を促したい次第です。

私の年代論・日本列島の起源は

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫

広大なユーラシア大陸最東端に位置する島国・日本には、いつごろから、どのようなヒトが住み始めたのでしょうか。この問いに関しては、2000年11月5日(日)の「旧石器遺跡捏造事件」が発覚する以前は、数十万年前の「原人段階」のヒトが日本列島に生活していたと考えられていました。しかし数年に亘る検証作業によって、日本の前・中期旧石器時代遺跡(3万年前以前)はすべて捏造と判定され消滅してしまいました。その結果、確かな遺跡は武蔵野台地の「第X層文化」が最古となり、その年代は3万5千年前のヨーロッパ「後期旧石器時代」、そして人類進化史の「新人段階」(ホモ・サピエンス)に相当するものでした。

近年、遺伝子人類学の研究が進展し、ヒトはアフリカで誕生し、原人と新人段階の二回の「出アフリカ」で全世界に拡散したことが判明しました。そして、日本列島には第二回目(新人段階)の出アフリカの拡散行動で、人類が初めて経験する「海洋航行」で渡来したことが確認されています。

(1) 人類の誕生と進化

私たちの祖先は1000万〜700万年前のいつの頃か、アフリカの一角でチンパンジーやゴリラ(類人猿)の祖先と別れて独自に出発し、「猿人↓原人↓旧人↓新人」と姿を変えて進化の道を歩んできました。人類とチンパンジーとの違いは、直立二足歩行(動くヒト)で、技術(手先が器用なヒト)や文化(知恵あるヒト)を発展させたことです。

猿人は700万年前頃に誕生し、樹上と半地上生活を中心に植物質食糧や死肉を食し、河原石を僅かに打ち割った礫石器が後半に出現しています。原人は200万年前頃に誕生し、脳が大きく発達し火の使用も認められ、動物解体用の両面加工の石器が登場しました。肉食の開始でエネルギーが増し、第1回目の「出アフリカ」を可能にしました。旧人は80万年前頃、アフリカを出た原人がヨーロッパで進化しネアンデルタール人と呼ばれました。洞窟生活と墓を構築し、狩猟技術も突き槍から投げ槍に発達し、敏捷な小型動物も捕獲可能になりました。しかし、ネアンデルタール人たちは、3万5千年前頃に絶滅してしまいました。新人はアフリカで約20万年前頃に誕生し、第2回目の「出アフリカ」を果たし、ヨーロッパに至った新人はクロマニヨン人と呼ばれ、それ以前に生活していたネアンデルタール人と、単なる「絶滅交替劇」ではなく、一時期共存、混血した証拠も判明しています。

(2) ホモ・サピエンスの誕生と拡散

我々の直接の祖先である新人(ホモ・サピエンス)の起源については、「多地域進化説」と「アフリカ単一起源説」の二つがありますが、近年の遺伝子人類学の研究で、世界各地の現代人の共通の祖先の年代が20万年前以降と判明した結果、現在では後者の説が支持されています。

(3) ホモ・サピエンスの特徴

新人としての特徴は、それ以前の人類には見られなかった「現代的行動」の樹立です。それは抽象的な概念の理解、深い計画性、創造性、象徴能力などです。つまり集団間の協調

性、道具技術の各段の進歩、芸術性の高揚、葬送儀礼の確立、さらに寒冷地や島嶼環境への適応です。

(4) スタンダランドはアジア人の故郷

アフリカで誕生した人類は、原人段階で最初の「出アフリカ」を果たし、西に向かった集団はヨーロッパに、東に向かった集団はヒマラヤ山脈の北コースと南コースに分かれ、前者はシベリア地方に、後者はインドネシアの島々が繋がっていた「スタンダランド」に到達しました。第2回目の出アフリカは新人段階で、人類で初めて「酷寒地」や「海洋世界」に進出しています。

(5) そして日本列島へ

スタンダランドは4万年前頃の地球温暖化で島嶼化が進行し、海岸部に居住していた集団の一部が「黒潮海域」に進出した。彼らは大陸沿岸部や島嶼地域を北上し、台湾島、古琉球列島(沖縄・奄美諸島)に一時定着し、やがて古本州島(九州・四国・本州)が陸地で繋がっていた)へ至りました。

現在、日本列島への人類の渡来コースとしては、この南からの「沖繩ルート」(3万5千年前頃)、北からの「北海道ルート」(2万年前頃)、「対馬ルート」(3万2千年前頃)の三つが想定されています。いずれのルートも「渡航具」(筏舟、丸木舟)を使用して「海を越えて」渡来する必要がありました。

こうして日本列島への人類のはるかな旅は、アフリカで新たに誕生した「ホモ・サピエンス」たちが獲得した「現代的行動」を駆使し、地球規模で拡散した「4万年前以降」の出来事でありました。

年代論に対する苦言かな

歴史作家 関 裕二

邪馬台国とヤマト建国を語る上で、絶対年代を特定することは、至上命題と言っても過言ではない。

しかし、しかしである。これが、はっきりとわからないの

である。分からないものは、分からない。分からないのだから、仕方が無い。

土器編年は相対的だ。炭素14年代法もあてにならない。年輪年代法にも、限界がある。最先端の酸素同位体の研究は有望だ。けれども、万能ではあるまい。今ある材料でヤマト建国の絶対年代を特定するのは、無理なのだと思う。

「分かった」「私の考えが正しい」「お前の考えは間違っている」と、声高に叫ぶ必要がどこにあるのだろうか。

それはおそらく、「まず自説ありき」なのであって、「自説の物差し」に合わせようと、年代論を利用して。本当に客観的に判断しているのかどうか、実に心許ない。

こんなことを言い出すと、

「不誠実だ」「卑怯だ」

と、罵倒されるかもしれない。

「そもそもお前は、どういう年代観を掲げているのか、それを示せ」

と、詰め寄られそうだ。

小生は、

「はっきりした年代観は、いずれ分かってくるだろうが、今は、数十年の幅を考慮して推論を出さざるを得ない」と

と考える。それでも、推理は成立する。「ずるい」と罵られても、しかたない。だって、分からないものは、分からないのだから。

特定できる決定的な証拠が出現するまで、年代論は、見守るしかないと思う。

あしからず。

倭地と韓地の原始暦

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

1

わが国の歴史問題への人々の関心は、中世の武士たちが活

躍する諸戦乱関係のほうに遷りつつあるのかという時期に、わが国最古の歌集『万葉集』に由来という新元号が発表されて、関連する地・事物にも注目が集まっている。古代と中世との歴史アプローチを比べると、上古では時間と場所、それに人物的確な把握が歴史事象の解釈にあたり大きなポイントになるという点で、上古史は中世史とは研究の姿勢・方向に大きな差異がある。中世史の研究者たちはあまり感じないのかもしれないが、「時間と場所」が上古史では一義的に把握されてこなかった。これが、上古史関係の諸論争の大きな問題なのであり、それら解決の基礎にある。

さて、上古代の倭地の暦は、『日本書紀』の紀年記事の分析により、同書では、五世紀中葉の第二十代安康天皇の治世を境目として、少なくともその次代の雄略天皇以後は元嘉暦が使われ、前代第十九代允恭天皇以前は儀鳳暦が使われて紀年表示がなされている。というのが、現在の定説とされよう(安康治世については、どちらとも判断しがたいが、一応、元嘉暦紀年のほうに入れておく)。元嘉暦、儀鳳暦がともに中国からもたらされた太陽太陰暦であり、儀鳳暦のほうに元嘉暦よりも成立が遅かった事情などから、允恭天皇以前の『書紀』紀年は、後世に造作されたものとする見方にも大勢がなっていた。

これら中国暦の伝来より前に倭地に原始的な暦がなかったかという問題がある。これについては、『魏略』逸文に見える「その俗正歳四節を知らず、ただ春耕秋收をはかり年紀となす」という記事から、一年が春秋それぞれの年からなるという「二倍年暦」が行われたという説(管見に入った限りでは、古田武彦氏や安本美典氏など)も出されていた。こうした倭地古暦の問題は、総じて言うと、学究筋からは無視されがちであって、元嘉暦導入より前の紀年記事はすべて後世の造作とされがちであった。

その一方で、『古事記』の崩年干支に基づき、その最初に

見える崇神天皇の崩年を西暦三一八年とか同二五八年とかする説も多く出されていた。その場合は、なんらかの古暦の存在がなければ計算ができないはずなのに、それがどのような暦であったかの議論がなされてこないのは、不思議というしかない。この崩年干支が『書紀』紀年の崩年とほぼ合致するのは第廿七代安閑天皇以降であり、この時期より前の時期の崩年干支は信拠すべきではないとする見方も当然ある。

この倭地の原始暦問題について具体的にメスを入れたのは、歴史学界とは無縁の理系学歴をもつ貝田禎造氏であり(当時は奈良県庁勤務の公務員)、それが発表されたのは「古代天皇長寿の謎―日本書紀の暦を解く―」という著作(一九八五年刊行)である。この書では、書紀紀年の分析により、倭地当初の古暦は四倍年暦であり、次ぎに二倍年暦、そして現在の一年がそのまま一年となる等倍暦という推移をたどったと論証、主張される。

私は、その斬新かつ合理的な論考に衝撃をうけ、人間の一代(代替わり)が生物学的に古代から現代に到るまで少しずつ長くなる傾向があるものの、総じて言えば、約廿五〜三十年という幅のなかで安定していること、これが倭地古代氏族の多くの諸氏の系譜世代の比較検討を通じても言えるうえに、古代諸天皇の人数(即位者数、代数)とその標準的な世代数(世代配分)とにより、二元二次の回帰式をいくつか試算したところ、計算値が貝田氏の倍数年暦論を基礎とする試算値とほぼ合致すると分かり、四倍年暦の存在を提唱する貝田説の妥当性を認めざるをえなかった。この辺を若干の微調整をしたうえで、拙著『神武東征』の原像(二〇〇六年刊行)に試算数値を取り入れた。

この書では、神武天皇の存在を認め、即位年を二世紀後葉の西暦一七五五年頃で、在位期間が十九年とみたが、この数値は、貝田氏の上記書では明確に示されないものの、その計算数値を延長させるとまったくの同年となる。上記に続く拙著

『神功皇后と天日矛の伝承』(二〇〇八年刊)では、朝鮮半島の百済や新羅でも、倭地と同様に四倍年曆・二倍年曆という倍数年曆の時期があったと、これらの国々の諸王の系譜分析を通じて提示した。

2

これ以降では、「四倍年曆」論を支持する説は、まったく現れず、そのまま消えゆく運命なのかとも感じていた。ところが、二〇一六年六月に当時の大阪市立大学教授の谷崎俊之氏が『記・紀』の紀年記事を分析して、「倭地の原始曆は四倍年曆」とする研究を『数学セミナー』第五号で発表されていた。このことを、昨年夏になって知り、私は大きな衝撃を受けた。ここでは、その概略を紹介させていただく。ちなみに、谷崎氏は、昨年三月に日本数学会のJMSJ論文賞(Journal of the Mathematical Society of Japan)に掲載の卓越した論文を顕彰する賞を受賞されており、多くの数学関係の著作がある数学の専門家である。

この問題を検討された谷崎氏自身が「驚くべき結論」と表現するのが次の結論であり、それをそのまま表示させていた(表現中のA及び(a)(b)の内容は省略)。

① 太陰曆註・太陽太陰曆のことが輸入される前の日本に、日本独自の曆が存在した(原始曆と名付ける)。

② 原始曆は4倍年曆の太陽曆である。

③ 原始曆の元日は、西暦で3月前半、6月前半、9月前半、12月前半の年4回あった。

④ 成務を除くA群の天皇の没日に関しては、原始曆による原資料が存在した。『古事記』はこれを交換(a)を用いて太陰曆に直した。一方『日本書紀』は交換(b)を用いて太陰曆に直した。

私自身にも、数学的な細部や理論についてはよく分からない部分もあるが、要は、貝田氏提唱の「四倍年曆」論は数学

的に成り立つ、と言うことである。こうした年曆に基づく数値が生物学的にも妥当であれば、あとは歴史の大きな流れのなかで、歴史的事件の登場人物や地理環境などが自然なものとして把握できるかという問題である。

これで、もし不自然なものがなければ、超長寿や超長期の在位期間などの理由で、後世の虚構とか造作とか言われてきた上古の諸天皇が、具体的な実在性を帯びるということでもある。記紀に記される名前が後世風のようなから、実在性がないという否定論は成り立たない。即位者の数に現実にかぞえられても、名前が不明ないし不安定な天皇もいるからである。例えば、六世紀後半の欽明天皇の実名は、現存史料からは探索不可能である。

3

上古の日本列島と関係の深い朝鮮半島や中国・東北三省にあった古代諸国家については、百済次いで高句麗が七世紀、六六〇年代にともに滅亡したことで、しかも各々の支配層の多くが唐へ連行されたり、日本に逃れたり、史料滅失が甚だしい。当地の主な歴史書は、遙かに成立が遅い十二世紀中葉の『三國史記』しか残らない。このため、朝鮮半島とそれにつながる地域の歴史は、どうしても当該書に依拠して考えざるを得ない。

この書についても、新羅の金王家一族の流れを汲む編者の事情で、様々な問題点や恣意性・造作性を云々するものもあるが、編纂姿勢を伝えられるところから見て、歴史書としてそれほど問題があるとは思われない。ただ、百済・高句麗の関係史料が殆ど滅失していたことをはじめ、編纂当時までに伝えられていた紀年表示、すなわち曆法を現行曆法そのまま鵜呑みできないのではないかと、というのが根本の問題にある。

朝鮮半島では、『三國史記』に記載の長すぎて遡上しすぎる王曆・紀年を具体的に疑う研究者は少ないようで、疑念を

挟む者は上古の古い方の年代記事を切り捨てる程度の研究方法である。日本や中国の研究者では、史料批判は若干はあるが、それでも津田博士流の造作論・切り捨て論が殆どである。総じて史料が乏しい上古研究が、こうした姿勢でよいものだろうか。古代人の創造能力の過剰評価とでも言えそうである。これを、時代により地域により曆法が異なった結果を、そうした認識なしに編著作時の曆年と同様だと誤解して把握した結果にすぎないとみたほうが自然である。

それでは、どのような紀年修正法があるのだろうか。

歴史的には、多くの人々が参加しており、それら関係者の交渉・交戦や相互交流、通婚などもありうることで、また記録媒体も種々あることから、そうした突き合わせのなかで穩当なものを選んで、年代を積み上げるといった方法も考えられる。現地の朝鮮半島には史料が残らなくとも、現在までに分かってきた金石文や日本や中国などに残る関係史料から、朝鮮半島の歴史を再構成するというところでもある。この辺を述べ出すと長くなるので要点的なものだけ、ここでは記しておく。

個別に言うとう、高句麗については、初代王たる朱蒙の中国史書での記事から見て、『三國史記』に記す建国年代が三十年ほどの年代遡上に留まるが、太祖大王宮の九十年超にも及ぶ長大な治世時期の疑問があり、個別系譜には種々の検討・修正を要するものもあるようだし、好太王碑文の記事から見て、同碑文当時の高句麗の紀年は現在使用される干支と一年差のある「顛頊曆」(センギョク曆)の使用も指摘される。

百済や新羅については、『三國史記』に記す建国年代が大幅に遡上されている可能性が高い。私見では、それがともに二世紀代の中葉・後葉頃ではないかとみている。具体的には、百済では近肖古王より前代、新羅では訥祗麻立干より前代(それぞれの王の治世期間の途中から以前という可能性があるが)では、倍数年曆の使用が十分に考えられる。これは、

新羅や百済の諸王の一世代の治世期間が約百年にも及ぶ長大なものである例もあつたり、交流があつた同時代・同世代の人々の活動期間の比較などから導かれるものでもある。

朝鮮半島の研究者はともかく、中国や日本の研究者は『三国志』記載の「非生物的年代観」をどうしてそのまま無批判に受け入れるのか、と私は常々訝しく思っていた。ところが、最近、中国インターネット上の「ウィキペディア」に当たるとなると H P「百度百科」には、割合合理的と思われる高句麗の王暦年代観の記事があることに気づいて、同 H Pを見直すようになった。当該百度百科では、百済王についても尉仇台(後漢末年の扶余王)をまずあげて、次に肖古王(在位一六六〜二〇四年と記す)から歴史を始めており、この王の在位年代はともかく、二世紀中葉ないし後葉に百済の建国を認めるようでもある(新羅王暦代の治世時期については『三国志』通りなので、残念ではあるが)。

この辺は一例であるが、『記・紀』の紀年記事も、『三国志』のそれも、現在の暦法だけに拠って理解するのは問題が大きい。現存の史料などに限界があるなか、安易な思込みを排して、具体的な一人の人間として、できるだけ合理的な紀年把握につとめるべきものと思われる。

(平成三十一年四月中旬に記)

初期庄内形甕出現以前の近畿

関西大学大学院非常勤講師 森岡 秀人

半世紀前の有力学説 私が考古学の勉強を始めた半世紀ほど前、「邪馬台国の時代」は、弥生文化の時代として語られていた。中国史書に記された二世紀後半の「倭国乱」が終わり、集落からは戦いの不穏な時代が過ぎ去ったので、平和裏に営まれたムラムラが沖積地に数多く存在するようになり、防衛的戦鬪的な立地・機能を示す西日本の高地性集落も消滅した。その後、環濠集落も中期末の同じ頃に消滅していくの

も同様な変化・現象と考えられるようになった。小さな衛星的なムラに分解して沖積地に広がるというものであり、それが乱後の落ち着きを取り戻した後期の社会という説明になっていた。三世紀のおよそ一〇〇年がその期間であり、大乱の終息を契機に邪馬台国出身の卑弥呼が倭国女王に共立され、近畿圏には畿内第 V 様式が広く分布し、まるでその勢力を誇示しているような説明をする人もいた。

無論、古墳の出現はその後のことであつて、三世紀の末から四世紀初頭にかけて、最古の古墳が山城や大和に築かれるというストーリーであつた。いわゆる小林行雄説による古墳時代の始まりにもうまく接合し、邪馬台国の時代はその前段、弥生時代の後期でしっかりと説明されていた。古墳の年代的上昇はこの時代区分原理・年代観を採る限りにおいて、三世紀に遡ることは全くありえない。卑弥呼の活動が古墳の築造開始の中で考えられることは控えられたのである。学史にしか残っていない話と思つてはならない。庄内式土器の始まりが四世紀初めと理解する人は厳然と存在し、それも歴史観の一つであり、完全に否定することはできない。

盤石とみられた年代観を疑う 私がそんなことはあるまいと思ひ始めたのは、卒業論文のテーマを考えつつ、各地の弥生土器を積極的に見に行くようになってからである。一九七〇年代前半の頃の話である。畿内第 V 様式と呼ばれる弥生時代後期の土器は絶対量が生半可ではなく、たくさん出土する。これが三世紀の一〇〇年も満たない期間に製作されたとはとても思えない。土器の多さを生産力の発達や人口の急増だけで説明するのは難しいのではないか。そう率直に考えてみた。偉大な小林学説、それを引き継ぐ佐原真・田辺昭三論、銅鐸をめぐる年代論、もっと言えば、弥生大形青銅器群全体が弥生社会で終焉を遂げるのは、その時代の最末期、新たな国家の成立、ムラからクニへの動きの過程で、その統合の象徴的事件として埋納による完全終幕が考えられたわけである。銅

鐸の大量埋納例もまだ少なかった時代のことであり、当時としては非常に分かりやすい考え方、プログラミングとして、教科書の叙述でも多く採用された。学校現場でも考古学から発する有力見解は懸念なく受け入れられたことと思う。高校二年生で読み終えた小林行雄著『古墳の話』(岩波書店)で、読書感想文を原稿用紙に数枚書いたが、これは同級生の小峰公君の勧めによるものであり、理系に進んだ彼ならではの積極的な推薦書であつた。一九七四年、初めて京都の北白川の小林邸を訪問する機会があつた。小林作図資料の引用に関する承諾を得るためであつた。一緒に行った村川行弘さんが三角縁神獸鏡の新例の話をし始めたので、じつと聞いていた。たしか兵庫県篠山市のよせわ一号墳出土鏡であつたと思う。画文帯対置式神獸鏡で兵庫県立考古博物館山下銅鏡リストにあがつている。その折、銅鐸や弥生後期の年代に関するお話を話題にしたかつたが、残念ながら緊張もあり、うまく言葉にできなかった。

近畿における後期高地性集落への問題意識 そのうち、弥生後期の土器を出土する高所立地の遺跡が増え始めた。前々から兵庫県芦屋市会下山遺跡のように後期に続く高地性集落は存在したのだが、後期単純期の高地性集落が目立つようになってきたのだ。大阪府和泉市観音寺山遺跡は環濠も巡らす大型の後期高地性集落であり、石部正志さんや森浩一さんは三世紀にも動乱があつたのではないかと考え、石野博信さんは卑弥呼治世後、宗女台与を立てる時の二度目の争乱があつたのではないかと睨んだ。確か弥生後期の土器を細かくできないのかと、模索中といった印象を抱いた。

同世代でちょうど二〇歳上で活躍する佐原さんと石野さんの土器観はかなり違う。それは石野さんが奈良県豊後向遺跡を掘り始めていたからだと思う。また、森さんや石部さんも近畿の後期高地性集落に瀬戸内の中期盛行型とは歴史的背景の違いを指摘し始めていた。一九七〇年頃に発掘された高槻市

紅茸山遺跡のごとく弥生後期でも最も新しい土器が確認できる高地性集落もあり、三世紀とされた弥生後期が低地に回帰した平和なムラムラで成り立っているわけではなかった。近畿では弥生後期段階の高地性集落が結構ある。一つ一つ登れる遺跡は踏査を開始した。弥生土器や石器が拾える集落遺跡も存在したのだ。

モノサシとしての後期の目盛り。そこで、近畿弥生後期とされる畿内第五様式の編年自体の再検討を志し、細分することを試みた。「無文様の第五様式は年代が短いし、前半と後半の二分が限界で、そんなに分けられないよ。」と佐原真さんから忠告を受けたが、「弥生後期の高地性集落の動きを明解にするには、五様式を細かくすることが先次と思われませう。」とお応えした。佐原さんは文様のない第V様式や古い土師器がどうもあまり好きではないらしい。須恵器も同様らしくった。小学生から縄文土器屋さんとして出発した佐原真さんは、文様が複雑に存在するその方が型式分類がやりやすいし、中期末までは同じように分ける仕事ができている。第一様式と第四様式まで、(古)(新)、(古)(中)(新)のような段階区分の仕事も旺盛に進められた。第五様式は師匠の小林行雄さんの仕事に準拠しながら見直しを述べているものの、所詮三世紀の一〇〇年間程度の土器と思われたようで、私が必死に五様式と取り組んでいることに好意を持ちつつも努力が実るのかなあと思ったらしい。

しかし、なんとか細分が可能であった。私は長文の卒論の第三章のみを近畿後期土器の編年細分記述に使った。集落の消長、とくに高地性集落の動態を知るには不可欠な作業であった。その作業を見守る播磨の今里幾次さんや山本三郎さんは、関心を抱いているいと細かな話を聞いてくれた。石野さんもその章のみを考察として掲げた『河内長野 大師山』という報告書(一九七七年刊)を読んでいたとき、五段階に細分できるのかと言ってくれた。同じ頃、同世代に近い森田克行

さんや寺沢薫さんらも畿内第五様式に夢中になっていたし、都出比呂志さんは「古墳出現前夜の集団関係」を『考古学研究』(一九七四年)に発表し、中河内での着想を表明し、高地性集落と前期古墳の連結に先鞭をつけられた。京大助手の頃の仕事だ。研究総会で口頭発表された都出さんには矢継ぎ早に細部に関わる質問をし、大変困惑された様子だったが、それを契機にお付き合いが始まった。「各地の一括資料を出されて、時間的な併行関係を問われたのは驚いた。見えない出土土器も多く、人泣かせな人だと思った。」と言われた。

庄内式土器の認識と関川尚功による細分。庄内式土器については、大学一回生の時、友人の関川君からこれを読めと言われて、田中琢さんの論文「布留式以前」を食るように読んだ。一九六五年に発表されたものだが、当時、島上高校の原口昭三さんも南河内の松原で同段階の土器の弁別と取り組まれている。それより前では、今里さんから頂いたプリントの資料に「橋詰式土器」の特徴とその資料的意義がよく書かれており、庄内式土器と今呼ばれている土器資料へのトライとしては、一九六〇年発表のものであったので、最も古いものかもしれないと思った。尖り底の庄内形壺がきっちり紹介されており、古墳出現前後の弥生からの過渡期の土器としての位置付けが明解であった。

大学三回生の時の関川尚功君の網干ゼミ発表は、「庄内式土器について」であり、既に纏向遺跡における成果を踏まえた考証が示されていた。遺跡数・遺跡分布、庄内式の定義、その細分の見直しや地域性が論じられており、畿内第五様式を継受する土器論であり、二人よれば九型式程度の土器の細分が近畿で貫徹するところまでいっていったように思う。学生にとって、定点的な遺跡の出土品整理は大変有力なヒント、アイデアを身につけてくれるもので、当時、私は撰津・会下山遺跡と垂水遺跡、河内・大師山遺跡と取り組み、関川君は大和・纏向遺跡にどっぷり漬かることで果たされたように思

う。大切な姿勢であったと考えられる。ここは大学生にぜひ読んで欲しい。纏向遺跡では庄内式段階の土器を纏向Ⅱ・Ⅲ式とし、纏向Ⅰ式のごとく前半期は第五様式との関わり、触れ合いを有している。大和型と河内型の庄内形の壺もかなり早くから教えられ、土器製作原理の違いが数多くの属性の違いとなつて説明される点に関心を抱いた。紀伊型壺もどの部分で仕分けするのがわかったが、これは現在、私が淡路型を定立して呼び名を変えてしまったが、口縁部端面を刻むか叩くかは、報告書の実測図では判別がかなり難しい。

時間の長さが問題になるようになった庄内式土器の段階その後、一九八〇年代に入つて、時代・時期区分にも関心がわき、その時間的推移こそが当該期の歴史を左右すると思うようになった。二つほどの論文で挑戦し始めたが、雑誌『信濃』の後期の年代(一九八五年)は俄然古くしたので、東日本の方々も驚いたようである。現在はさらに古くなっており、五様式の年代幅は紀元二〇年から一八〇年頃の二六〇年間である。新王葬代の初期泉貨は一世紀前半頃に大阪湾岸地域に急速に到来、伝播していると考えている。石野博信さんや都出比呂志さんは後期の始まりは一世紀末あたりまで下がるのではないかという批判ももらった。佐原さんは、「自分の後期が全く別の前世紀に移動したので、反応を楽しみにしていたが、部下の光谷拓実さんが懸命に年輪年代と取り組んでいるので、それに託しており、「あなたの年代観が正しいかもしれないし、私の年代観にもまだ脈がある。」と、潔いよいお手紙を頂いた。佐原さんらしいと思った。白石太一郎さんは、「前期古墳の開始年代、箸墓古墳の年代なども熱心に考えているが、畿内の五様式の全体的上昇は古墳出現年代を早めようとしている私には後押しになる。よい年代傾向と思われる。」とおっしゃっていた。

池上曾根遺跡の大型建物の建立年代が年輪年代によつて紀元前五二年という数値が付けにされる頃には、都出さんは

「森岡さんの予防注射があったので、年代観の移行に大きなブレーキはかからない」とコメントされた。春成秀爾さんは一九九六年段階では、「半信半疑だけれども、根拠をいろいろと聞かせて」という電話を頂いた。しかし、森浩一さんだけは真つ向から、「考古学者が科学的年代に引き付けられて、みんな風邪をひくなよ。」と、辛口のコメントをもらい、今でも「確証のない実年代を語るな」というお言葉が耳に染み付いている。

布留式土器が三世紀の中頃を遡ることはないから、庄内式土器の帰趨はどうなるか。私は七〇年前後と睨んでいるが、研究者によってまちまちであろう。ちなみに岸本文さんや赤塚次郎さんは庄内式併行期の始まり自体を古くするので、一・二〇年間ぐらいを考えているのではなからうか。

田中論文では三世紀末、四世紀初めの過渡期のような存在とみられた庄内式土器の時期も区分原理に暦年代も持ち込まれるようになり、点から線へと拡大した感がする。その分当該時期の墳墓も古墳か墳丘墓の呼称の別は措くとして、相当その数が増した。土器からも細かく編年できるし、銅鏡副葬や鉄器副葬の様相からも区分を細かくすることが可能であり、纏向遺跡の存続年代も多様化している。歴史叙述で対立する意見が増している要因もこうしたところに見られるのである。

結び

駄文として読まれた方には気の毒であるが、一文を草した理由はほかでもない。読者の多くが「邪馬台国の時代」を必死に考えている人と思うので、悩みはみんなて共有したいということである。考古学には実証的証拠が不可欠である。この時期の単著を私に要望される人が多いが、執筆中の『箸墓前夜』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー）も勉強と資料の不足でそのまま途中になっている。

方形板石硯と弥生時代の年代

國學院大學客員教授 柳田 康雄

長方形板石硯とは、國學院大學の故吉田恵二の「長方形板石硯考」（1993）によると、漢の石硯中もつとも遺品が多く、普及範囲も広いのが扁平な長方形板石硯だという。「長方形板石硯のうち、年代的にもつとも古く位置付けられるのは前漢中期である。しかし、前漢中期から後期に位置づけられる遺品は少なく、前漢晚期以後急激に類例が増え、後漢代に入ると数量が増え、分布域も広域にわたるようになる。前漢初期にさかのぼる円形板石硯や前漢前期に位置づけられる卵石硯に比べると、長方形板石硯の出現は遅れるが、前漢末期に現れる三足円形石硯よりは早く出現する」（吉田1993・2018）という。1931年に朝鮮半島の楽浪彩磁塚木槨の前室から漆盒に納められ硯台に載った長方形板石硯が発見され石硯であることが明らかになったように、朝鮮半島にも後漢代に確実に分布しており、曹喜勝（2003）によると時期は明らかではないがビョンヤンの楽浪一帯では約25個の各種硯が出土しているという。

日本では、島根県松江市田和山遺跡の石製品が硯と研石と判断され、東京国立博物館所蔵品（小倉コレクション）と共に実測図が紹介された（白井2004）。翌年の2005年には田和山遺跡の報告書も刊行され、東京大学考古学研究室所蔵の王盱墓出土品の石板と研石や彩磁塚レプリカと比較検討された（松江市2005）。

田和山例確認から13年経過した2016年になって、福岡県糸島市三雲・井原遺跡群番上地区出土の小石片が報告書未刊行のまま「石硯」と速報され（武末・平尾2016）、賛否両論で話題になった。そこで、田和山遺跡や三雲番上遺跡の小石片が「石硯」であれば他にもあるはずだと確認作業をはじめた次第である。砥石などと報告されていた資料を再検討した結果、福岡県筑前町東小田中原遺跡（石井編2001、

柳田2015）、同葉師ノ上遺跡（石井2005、柳田・石橋2017）での確認以来、2018年5月末で国内10例（柳田2018）、2019年3月末現在で和田山・三雲番上例のような小石片や方形板石硯と研石合わせて40例以上を確認・実測したが、未確認を含めると45例を超す勢いで急激に増加しつつある。しかも本年になって、最古例の未製品を玄界灘沿岸のイト国とマツラ国の2遺跡で各々数例発見し、工具である「石鋸」類も他遺跡を含めて9例以上を確認・実測した。

中国では、自然石を利用した石硯が紀元前200年頃の前漢初期に出現し、紀元前100年頃の前漢中期になると扁平な長方形板石硯が出現している。前漢中期から後期に位置づけられる遺品は少なく、前漢晚期以後急激に類例が増え、後漢代に入ると数量が増え、分布域も広域にわたるようになる（図）（吉田1993・2018）。

日本では、玄界灘沿岸の糸島市潤地頭給遺跡と唐津市中原遺跡の2遺跡で弥生中期中頃に出現と同時に倭国独自の方形板石硯の製作を開始している。方形板研石は、弥生中期後半に筑前町東小田峯遺跡で製作を開始している。弥生後期初頭になると、家形など厚みのある長方形研石も製作されている。

終焉—古墳前期前半までは確実に長方形板石硯が多数存在し、政治的交流だけではなく交易などにも活用されている。

長方形板石硯・方形板石硯・研石の分布は、現在のところ倭国で40例以上が確認でき、下記のように北部九州に集中するものの、一部が中九州・山陰・山陽・近畿にも分布する。

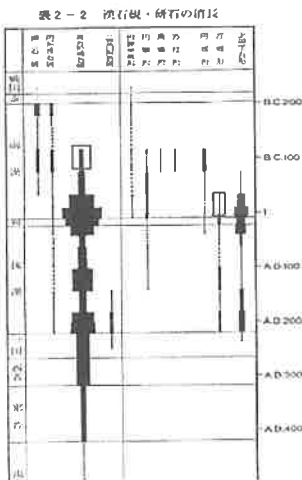
・福岡県糸島市5例以上、福岡市9例、春日市1例、筑前町8例（研石3）、小郡市2例（研石1）。佐賀県唐津市4例（研石1）、神崎市2例（研石1）、基山町1例。大分県日田市1例。熊本県阿蘇市2例。

・島根県松江市2例。兵庫県篠山市1例。未確認資料は、長崎県杵岐市9例（研石3）以上。島根県松江市数例。広島

年代	種類	青銅器	時代	時期	北九州	出土
中国 春秋 110-135	可変形式 鉄剣形式	Ⅰ-1	縄文	前期	黒川式	鹿野式Ⅳ式
戦国	変形形式	Ⅰ-2				船橋式
	土器	Ⅱ-1	弥生	前期	板付Ⅰ式	長原式
221	変形形式	Ⅱ-2				第Ⅰ様式
200	水石室式	Ⅳ-2	生	中期	Ⅰ	第Ⅱ様式
前漢	特異式	Ⅳ-3				第Ⅲ様式
	100	Ⅴ-1	後	期	Ⅱ	第Ⅳ様式
100	Ⅴ-2	第Ⅴ様式				
後漢	原三田	Ⅵ-1	代	前期	Ⅲ	雷打式
		Ⅵ-2				庄内式
184	三田時代		古	前期	Ⅳ	布留式
200						Ⅳa
220			古	前期	Ⅳ	Ⅳb
205						Ⅳc
250			古	前期	Ⅳ	Ⅳd
260						Ⅳe
300			古	前期	Ⅳ	Ⅳf
400						Ⅳg

表2 柳田庶雄編年表(2018)と板石硯の消長

表3 吉田憲二(1993・2018)



東原島市2例。奈良県田原本町1例。現在のところ時期が確定できるもので確実に中国製といえる長方形板石硯はないが、倭国特有の方形板石硯と研石の出現と終焉は図のように中国王朝と時期が対応しており、北九州と中国との交流が密接であると同時に、拙稿の青銅器などで1986年以来長年にわたって論じてきた弥生時代の年代や土器編年の正確さが証明できたことにもなる。ちなみに、国立歴史民俗博物館の炭素14年代測定法の弥生時代の年代だと、中国より約1000年早く北部九州で方形板石硯が出現することになる。葉師ノ上、比恵141次、田和山遺跡例など9例で墨らしき黒色付着物、迫額遺跡・吉野ヶ里遺跡・西

新町遺跡など11例で赤色付着物が観察できることから、これらが方形板石硯であることは確実である。

会員投稿

弥生時代のはじまりは500年遡ることはない！

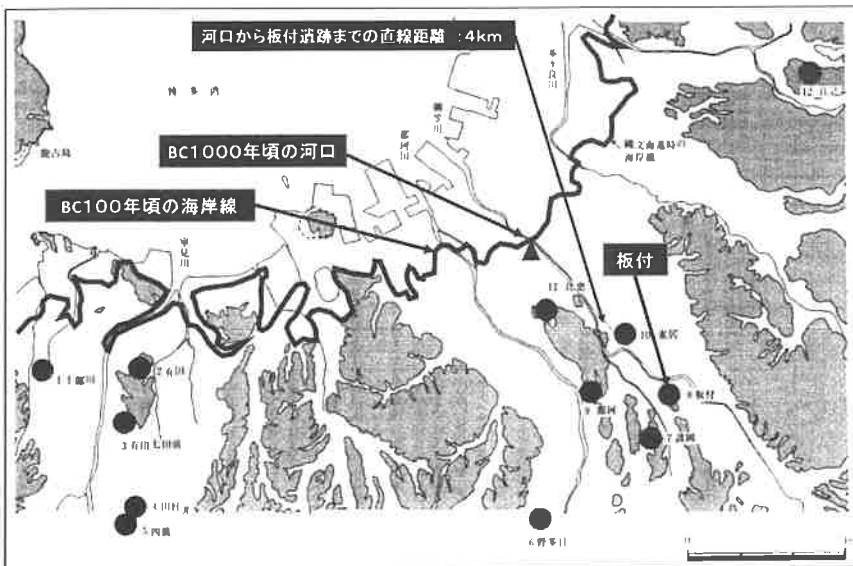
— 葉畑・板付遺跡は、臨海遺跡 —

丸地 三郎

ご存知のように、『2003年5月に、国立歴史民俗博物館(通称「歴博」)は、炭素14年代測定法のAMS法によって土器付着物を計測した結果をもって、弥生時代の始まりは、定説より約500年古い、紀元前10世紀とする新説を発表した。』この歴博の説について、疑義を呈し、根拠がないことを示します。

これに対して、学会などからは、実際より数百年も古いとの結果がでる海洋リザーバー効果の影響の指摘が行われた。歴博は、反論を行っており2005年に、総研大文化科学研究究に、藤尾慎一郎氏・今村峯雄氏・西本豊弘氏の共著として、『AMS-炭素14年代測定による高精度年代体系の構築』を発表し、反論した。この反論の中で、『ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。』とし、理由を、『海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性がある』と説明し、海洋リザーバー効果影響の排除を断言している。

ここでは、『海岸に接して立地する遺跡から出土した試料』について取り上げる。歴博が調査対象とした主な土器の出土地は、福岡県の板付・曲り田遺跡、佐賀県の菜鳥遺跡を挙げているので、これらの遺跡の所在地を確認し、海産食料に多く依存している可能性を論議する。勿論、検討する遺跡の海



岸線は、現在のものではなく、紀元前10世紀の海岸線とする。まず、1999年3月の藤尾論文中の「福岡平野における弥生文化の成立過程」の図を示し、板付遺跡と海岸線の距離を確認する。図中の太い実線は、縄文海進時の海岸線を太くならせたもので筆者が線の太さ等を変えたものだが、この線については、1998年発行・下山正ほか著「福岡平野の古環境と遺跡立地―環境としての遺跡との共存のために―」の中で、この海岸線の時期は見直され、約3000年前と結

論付けられている。この年代は紀元前10世紀に該当する。従って、黒字白抜き文字で追記したように、板付遺跡は当時の海岸から約4km上流の川に接し立地していたことが判る。曲り田遺跡も、3000年前の地形では、海岸線から1km未満に位置し、菜畑遺跡では、現在でも、約900mで、歴史年代に堆積した新砂丘帯を考慮すると、当時は、400mとなる。外の初期水田稲作遺跡と当時に戻された海岸線をみると、河口近くの川に面していることが読み取れる。食料を水田からの稲作だけに頼らず、海産物に多く依存していたことを考慮すると、土器付着物は、海産物を食料として煮炊きしてできた可能性がある。

従って、歴博が計測した土器付着物は、歴博の否定にも関わらず、海洋リザーバー効果の可能性の高いもので、計測対象としてはならないものであったことは明白。5000年遡るとの説は、撤回されるべきもの。

以上

詳細は、全邪馬連のHP私の邪馬台国論・平成30年最後にある同名の論文を参照ください。

わが図書を語る

『日本書紀』だけが教えるヤマト王権のはじまり

伊藤 雅文(著)

扶桑社新書 令和元年五月一日発行 定価 980円(税別)

二〇二〇年に完成一三〇〇年を迎える『日本書紀』。その解明に向けて新しいアプローチ法で古代史の真実に迫ります。定説・通説を覆す新説・新解釈が満載の一冊です。

【主な内容】●『日本書紀』には『原日本紀※げんにほんぎ』が存在した ●倭の五王「讚」「珍」「済」「興」「武」を比定する ●神功皇后は卑弥呼および壹与をトレースして

創造された ●武内宿禰像を再構築する ●「白鳥」がつなぐ日本武尊と蒼津別命(ほむむわけのみこと) ●「東征」はいつ、誰がしたのか ●継体天皇の二王朝並立説を考える ●古墳時代の三大金石文を解釈し直す(七支刀/隅田八幡神社人物画像鏡/稲荷山古墳金錯銘鉄剣) ●『原日本紀』は各天皇の治世に「無事績年(事績の記されない年)」のない編年体で記された文書であり、それに紀年延長操作を施すことにより『日本書紀』は完成したと考えられます。



アマテラスひとイツキヨミことスサノオウ

アマゾン電子書籍Kindle版 397円

オンデマンド(ペーパーバック) 1234円

著者 柴山 鳥人

大倭国(やまとのくに)の歴史が倒語(さかしま)の解読により蘇る。

東征前は古事記のイザナミの国生み神話の復元を起点にして、東征後は日本書紀の応神天皇8年(西暦277年、丁酉)を百済阿華王6年(西暦397年、丁酉)と同年の春分から秋分とした春秋半年暦の復元を起点にして、大倭国の歴史は復元できる。イザナギの左目より出たアマテラス日の神・

天照大神を祀る右目より出たツキヨミ・斎の宮が鼻より出たスサノオ・荒の王に統治を任せる面土国が大倭国の始まり。三種の神器の鏡は日の神を、勾玉は斎の宮を、剣は荒の王を象徴する。

アマテラスひと イツキヨミこと スサノオウ

国生み神話の復元を起点に
古事記と日本書紀から復元した

やまとのくに
大倭国の始まり



.....柴山 鳥人

玄界灘から見る古代日本

出版社・梓書院 定価・千八百円(税別)

著者 高川 博

島国である日本の歴史を考える場合、周囲を取り巻く海、そこを行き交う人々を考察することが欠かせない。本書は主として玄界灘(対馬海峡)に視座を置いて、古代の人々の移動や物流の状況を考察し、その姿を復元する。

●九州大学応用力学研究所の地上レーダー観測により、対馬海峡には直径何十キロという巨大渦の存在が判明している。

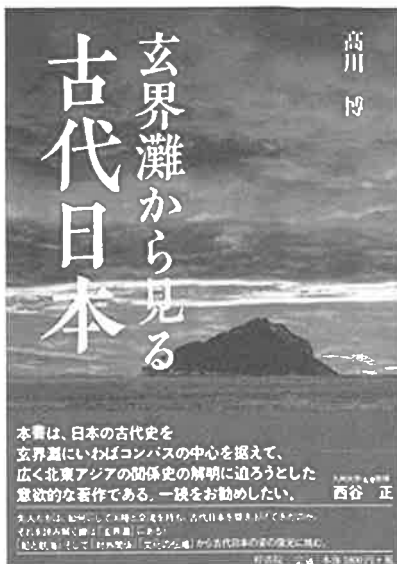
(考古学・古代史の分野では未知の世界)当然、この渦は渡海に挑む舟(船)に大きな影響を与えた。

●対馬と朝鮮半島(巨濟島)との間には鴻島や北・南兄弟島といった孤島が存在し、渡海の際には目印や休憩、避難場所として重要な役割を果たした。

●宗像と壱岐を結ぶ海上には小呂島があり、古来宗像勢力の航海ルートとして重要であった。後に宗像勢力と誼を結ん

だやマト王権は、これを新たなバイパスルートとした。

高川 博



魏志倭人伝の秘密を探る

出版社・22世紀アート kindle版 500円

著者 高川 博

邪馬台国や卑弥呼に関わる史料は晋代に編纂された魏志倭人伝であり、その時代における古代中国人の眼から見た倭人(倭国)の姿を復元する必要がある。その作業から浮かび上



古代史の秘密に迫る!!

魏志倭人伝を読み解く歴史小説

西暦2030年代の近未来から、200年代の古代の世界へ

古代中国人の眼から見た
倭国の本質の姿とは?

がった真相は、邪馬台国連合と狗奴国の争いの実態はなく、魏の半島派兵要請に対して、内乱を口実に派兵をかわす、という卑弥呼政権の戦略があった。

●魏から倭へ与えられた詔書や黄幢それに倭は、狗奴国との抗争勝利のためではなく、半島出兵による韓族牽制を目的としていた。倭の使いが、しきりに狗奴国との争いを強調しているのは記録されているが、疑わしい。魏が東夷の小国の紛争に、そこまで肩入れする必要はない。

●魏志韓伝にある韓族の反乱による帯方郡太守・弓遵の戦死という事実を無視・軽視してはならない。帯方郡の新しい太守となった王頌が派遣した張政は、倭兵の早期派遣を強く要求したに違いない。「夷を以て夷を制す」は中国古来の伝統政策である。

中央市・大館市 東京合同シンポジウム
— 源義光とその子孫 —
概要…源義光の子孫の動向を語るシンポジウム。
源義光・新羅三郎義光は後三年合戦で兄義家・頼朝の祖先を助けて勝利に導いた。義光の子孫には常陸源氏の佐竹氏、甲斐源氏の武田氏・小笠原氏・浅利氏・南部氏(陸奥)などがある。浅利氏は浅利郷(現山梨県中央市)に住し、その後比内(現秋田県大館市)を支配した。

関連団体主催イベントのご案内

中央市・大館市 東京合同シンポジウム

— 源義光とその子孫 —

概要…源義光の子孫の動向を語るシンポジウム。

源義光・新羅三郎義光は後三年合戦で兄義家・頼朝の祖先を助けて勝利に導いた。義光の子孫には常陸源氏の佐竹氏、甲斐源氏の武田氏・小笠原氏・浅利氏・南部氏(陸奥)などがある。浅利氏は浅利郷(現山梨県中央市)に住し、その後比内(現秋田県大館市)を支配した。

共催…中央市 大館市 北東北歴史懇話会(秋田産業サポートクラブ)

後援…中央市東京県人会 首都圏大館ふるさと会

と比内会 中央市歴史ボランティアの会 北羽歴史研究会 考古学を科学する会 東アジアの古代文化を考える会 蝦夷学会 全国邪馬台国連絡協議会

邪馬台国の会 日本の歴史と文化を楽しむ会

日時…2019年12月21日(土) 13時~17時30分
場所…蔵前会館 ロイヤルブルーホール(120名収容)
(東工大O B会館 大岡山キャンパス隣)
参加費…無料
挨拶 中央市長 田中 久雄
大館市長 福原 淳嗣
司会…横山裕司(北東北歴史懇話会 代表幹事)
基調講演「源義光を語る」
講演1 「甲斐源氏と浅利与一」 五味文彦 東京大学名誉教授
末木 健 山梨県考古学協会会長
講演2 「中央市周辺の中世遺跡・遺物」
岡野秀典 中央市教育委員会
講演3 大館歴史まちづくりと浅利氏・佐竹氏 齋藤和彦 大館市建設部長
講演4 大館市周辺の中世遺跡・遺物 歴史文化課
閉会挨拶 藤盛 紀明 北東北歴史懇話会会長
(全国邪馬台国連絡協議会特別顧問)

編集局だより

今回も顧問の先生と会員から多くの投稿をいただきました。御礼申し上げます。

今後は会員からの投稿をもっと増やしていきたいと思っております。皆様の投稿をお待ちしております。通常の投稿は、縦27文字×30行以内で事務局・菊池まで左記のメールアドレスまで御願います。

zenyamaren@gmail.com

*他者誹謗の記事は掲載できません。また、編集の都合により全部を掲載できない場合もあります。